

# 病理診断科

## 【概要】

適切な治療の基礎に適切な診断があり、適切な診断の要となるのが病理診断です。日々高度化する臨床サイドの要求に応えるべく、臨床医との緊密な意思疎通を図り、新たな疾患分類に即応し、免疫染色等の付加的手法を積極的に導入しつつ、正確で迅速な病理診断に努めています。

病理診断認証としては、日本病理学会登録施設および日本細胞学会認定施設として認証取得しています。

免疫染色においては、ロシュ社の全自動免疫染色装置を導入しており、染色の安定性・再現性が図られ、乳腺では、HER2、ER、PgR、MIB1(Ki-67)、胃癌摘出例ではHER2免疫検査を、全例においてルーティン化して実施し、他にも、リンパ腫、中皮腫、転移、原発探求が行えるよう、多くの抗体を保有し、診断に役立てています。大腸のRAS-BRAF、肺のEGFR、ALK、PD-L1、ROS1、乳腺のHER2/FISHは外部へ委託しています。

迅速組織診、迅速細胞診は、日中での数量は制限することなく実施、脂肪を含む凍結検体は川本法を導入し、薄切の品質を保つようにしています。また、病変マッピングはギョータックを用いて原寸大コピーをすることで、臨床側から評価を得ています。加えて、診断のスキルアップとしては、College of American Pathologistsの病理診断生涯教育プログラムに参加して診断レベルの向上に努め、細胞診は、日本臨床衛生検査技師会、日本細胞学会、山口県臨床衛生検査技師会等の精度管理調査に参加、また、週1回実施の呼吸器カンファレンス、月1回の乳腺カンファレンスに参加し、臨床との整合性を図り、他にも多くの研修会や学会に参加するよう心掛けています。

機器は、解剖室の吸引装置を更新しました。

部門システムとして、Dr.ヘルパー（広鉄計算センター）と電子カルテとの連携を図っています。

リスクマネジメント対策として、部門システムにある機能を活用し、臨床側が報告書を閲覧したかどうかを適宜チェックし、閲覧されていない報告は一覧表にして各臨床医に配布し、確認するよう促しています。

ホルマリン対策としては、第1管理区分であり、ホルマリン濃度は低値ですが、低レベルを維持するよう常に改善を図っています。

## 【スタッフ】

病理医 2名（うち1名は非常勤嘱託医）

臨床検査技師 3名（うち1名は病理専属の細胞検査士、1名は午前中外来検査兼務）

常勤病理医：安田大成\*1

非常勤嘱託病理医：谷村晃\*2

技師：川元博之\*3、佐々木真理\*4、山本美奈\*5

【所属学会および資格】

*1	日本病理学会病理専門医、日本臨床細胞学会細胞診専門医
*2	日本病理学会病理専門医、日本臨床細胞学会細胞診指導医 日本病院病理学会、日本臨床病理学会
*3	日本臨床細胞学会細胞検査士、日本臨床衛生検査技師会病理検査技師 山口県医師会山口県糖尿病療養指導士 日本臨床衛生検査技師会、日本臨床細胞学会、日本乳癌学会 特化物・四アルキル鉛等作業主任者、有機溶剤作業主任者
*4	日本臨床細胞学会細胞検査士 日本臨床細胞学会 特化物・四アルキル鉛等作業主任者、有機溶剤作業主任者
*5	日本臨床細胞学会細胞検査士 日本臨床衛生検査技師会、日本臨床細胞学会 特化物・四アルキル鉛等作業主任者、有機溶剤作業主任者

【病理業務】（2018年4月～2019年3月）

組織診（生検、手術）	2,510 例
術中迅速組織診断	117 例
細胞診	2,810 例
術中迅速細胞診	102 例
病理解剖	2 例